

## 第33回日本証券アナリスト大会を終えて

大会実行委員長 奥崎 智之 CMA  
(三菱UFJモルガン・スタンレー証券)

第33回日本証券アナリスト大会は、去る10月12日（金）に経団連会館の国際会議場・大ホールにて開催された。今大会の延べ参加者総数は、記念講演・パネルディスカッション及び懇親パーティーも含めると、1,250名超と過去最大となった。まずは、会場にお運びいただいた皆さまに厚くお礼申し上げたい。大会を成功裏に終えることができたのも、ご多忙の折ご参加くださったご来賓や記念講演にご登壇された講師・パネリストの方々、そして入念に準備を進めていただいた大会事務局及び実行委員諸氏のご尽力の賜物であると切に感じている。この誌面を借り深く感謝申し上げたい。

筆者は、昨年の第32回日本証券アナリスト大会に実行副委員長として大類委員長をお支えする形で携わらせていただいた。昨年の大会が非常に盛大に行われたこともあり、大会事務局から実行委員長就任の依頼を受けた際、強いプレッシャーを感じたが、大変な名誉であり拝命することとした。実行委員諸氏から筆者の実行委員長就任をご賛同いただき、ぜひ本大会を成功に導きたいとの気持ちを強く持った。

当大会の実行委員会では、大会テーマ、講師、パネルディスカッションの司会者やパネリストに関し、実行委員向け事前アンケート結果をもとに



総合司会の奥崎大会実行委員長

過去の大会テーマ等も踏まえ活発な議論が行われた。大会テーマに関しては、技術革新や反グローバルバリエーションの動きの中での企業戦略や成長戦略、ESGやダブルコードを受けたディスクロージャーの在り方、フィンテックやAIの進展への企業やアナリストの対処、そして「働き方改革」を踏まえた企業経営の在り方・アナリストの将来像まで、意見が幅広く挙げられた。様々な議論を経て会議では、「働き方改革」と「AI時代」に関係したものを中軸に据えることで筆者、副委員長及び事務局一任となった。事務局主導による講師及びパネルディスカッションの司会者・パネリストの候補者への就任依頼のプロセスを経つつ、今年のテー

マは「AI時代の働き方改革—企業とアナリストの取り組み—」とした。

一昨年のテーマが「AI・IoT革命に挑戦する企業とアナリスト」であり、引き続きAIに対する関心の高さを痛感したが、本年度は働き方改革の視点から“AI等の技術革新がアナリストも含め人間の働き方にどのような影響を与えるか、人間はAI等を活かしてどう「働き方改革」をしていくのか”“企業はAI等をどう使って、人間の「働き方改革」につなげ、かつ、企業の生産性を高めていくか”といった点に焦点を当て、AI以外の視点（例えば、ダイバーシティなど）もディスカッションの中で盛り込んでいく方向性とした。協会事務局・大会担当者の精力的な折衝により、AI時代の働き方改革に深い識見を持たれる魅力的な登壇者を早い段階で固められたことが、本大会が盛会となった大きな要因と考えている。

実際の講演会やパネルディスカッションの内容は、別稿に記載されているのでここでは詳しく述べないが、筆者の印象に残った点を中心に述べさせていただきます。

記念講演Ⅰは落合陽一氏が、アートとテクノロジーの接点となる活動の紹介も含め、AI時代にふさわしい新進気鋭の第一線の視点で講演の口火を切っていただいた。“ワークアズライフ”というコンセプトに関して事例も交えながら分かりやすくご説明いただき、目の覚める思いであった。加えて、随所に“ハッ”となる表現を用いてシャープな内容のプレゼンテーションをしていただきながら、一方で、ちゃめっ気もたつぷりに披露していただき、大変な盛り上がりとなった。

記念講演Ⅱは、歴史等の多様な切り口もお持ちの出口治明氏が、日本の国際競争力の低下を冷静に分析され、今後の日本回復の鍵を、「“飯・風呂・寝る”から“人・本・旅”へ」や、「企業は成績

採用に変えよう」「フランスのシラク3原則を参考にしよう」と、分かりやすい言葉で提言いただき、とても印象に残るプレゼンテーション内容で、更なる盛り上がりを見せた。出口氏の親しみやすい語り口と、随所に参加者に配慮した対応から、温かみを感じた瞬間でもあった。

その後のパネルディスカッションでは、アナリストとしても第一線で活躍された(株)日立製作所社外取締役ならび東京エレクトロン(株)社外監査役の山本高稔氏の司会の下、サイボウズ(株)代表取締役社長の青野慶久氏、(株)イー・ウーマン代表取締役社長や国際女性ビジネス会議実行委員長を務める佐々木かをり氏、ならびにアナリスト経験を持ち現在リサーチ部門マネジメントをされている三菱UFJモルガン・スタンレー証券(株)の塩原邦彦氏からなるパネリストにより大会テーマに関し意見交換をいただいた。青野氏の「AIと人間は戦う必要はない。人生を楽しむ視点でAIを使えばよい」との言葉、佐々木氏の「ダイバーシティでイノベーションを起こす」という気概にあふれた言葉、塩原氏の「アナリストを取り巻く環境変化と、今後のアナリストに求められるものに関する的確な視点」が大変印象に残った。参加者の皆さまの高まる問題意識に対して、山本氏が議論を的確に誘導・総括され、大会テーマに関する具体的な今後の指針がしっかりと焼き付いたのではないであろうか。

その後、証券アナリストジャーナル賞及びディスクロージャー優良企業の表彰の後、成瀬順也大会実行副委員長の司会の下、懇親パーティーが開催された。多くの方とお話しをさせていただき、本大会は実行前からの期待値も高かったが実際の感想や評価も極めて良好であり改めて安堵した。本大会がAI時代と働き方改革という流れの中、企業やアナリストの今後の行動に一石を投げられたのであればうれしい限りである。